

パメラ・コールマン・スミスとヨネ・ノグチ
— 国際詩人ノグチにとっての *The Green Sheaf* 誌の意義 —

角 谷 由美子

Pamela Colman Smith and Yone Noguchi:
The Significance of *The Green Sheaf* for the International Poet

SUMITANI Yumiko

要 旨

本稿は女性画家パメラ・コールマン・スミス（1878-1951）と詩人「ヨネ・ノグチ」こと野口米次郎（1875-1947）の比較研究である。両者は二つの大戦を経験し、ほぼ同時代を生きた。「モダニズム」と呼ばれる時代のど真ん中を生きた世代であるが、どちらも教科書に出てくるような人物ではない。コールマンの名は「タロット画家」としてこれまでオカルト界においてのみ知られている程度で、ノグチもまた国内外においてほんの一時「国際詩人」として名を馳せた人物であった。しかしながら、二十一世紀に入り、コールマン研究が始まり、ノグチ研究もかなり深められた。これにより、両者にはある接点があったことが明らかになった。1903年、コールマンはロンドンで *The Green Sheaf* という小雑誌を創刊し自ら編集長を務めたが、その雑誌にノグチの「The Violet」、「Evening」、「Mugen」という三篇の英詩が掲載されているのである。本稿では、この事実から、今まで論じられることのなかったノグチが *The Green Sheaf* 誌に詩を投稿した経緯や理由、またその投稿が両者にとってどのような意義があったのかを考察する。

キーワード：パメラ・コールマン・スミス、ヨネ・ノグチ、野口米次郎、『グリーンシーフ』、モダニズム

Abstract

Modernist painter Pamela Colman Smith (1878-1951) and poet Yone Noguchi, or Yonejiro Noguchi (1875-1947) lived in roughly the same generation and both experienced two world wars. Neither is the type of artist to be found in textbooks. Colman's name is most known in occult circles as "the tarot card painter." Noguchi is regarded for his short tenure as a known "international poet" in Japan, America, and England.

At the turn of the twenty-first century, Colman began to attract rejuvenated cultural and literary attention, and studies of Noguchi deepened considerably. This renewed interest has indicated the two shared a connection. In 1903, Colman founded the small magazine, *The Green Sheaf*, in London. *The Green Sheaf* subsequently published three of Noguchi's English poems, "The Violet," "Evening," and "Mugen." This paper will discuss how and why Noguchi submitted his poems to *The Green Sheaf*, along with the significance of the poems' submission and publication held for both Colman and Noguchi.

Keywords: Pamela Colman Smith, Yone Noguchi, Yonejiro Noguchi, *The Green Sheaf*, modernism

はじめに

1903年、ロンドンでパメラ・コールマン・スミス（Pamela Colman Smith, 1878-1951）という二十五歳の若き女性画家がたった一人である雑誌を立ち上げ編集長を務めた。*The Green Sheaf*という小雑誌で、十九世紀のデカダンスを象徴する文芸季刊誌 *The Yellow Book* に影響を受けたものだった。刊行は一年余りしか続かなかったが、その雑誌の末期の紙面には「ヨネ・ノグチ」こと野口米次郎（1875-1947）の「The Violet」、「Evening」、「Mugen」という英詩が掲載された。（以降、ペンネーム兼親しみを込めた通称名である「ヨネ・ノグチ」と記す。）伝統的に白人批評家の権威と価値観が大きく反映されてきた英文学史の流れにおいて、コールマンとノグチは二十世紀初頭のモダニズムの支流に追いやられ、その存在さえ忘れ去られたような人物であった。にもかかわらず、ノグチ研究は亀井により1963年から細々と、コールマンに至っては二十一世紀に入ってからようやく研究対象の射程に入ってきた。これまでコールマンとノグチの出会いも、また雑誌 *The Green Sheaf* の存在価値さえ注目されてこなかったが、実は、この生まれも育ちも全く違う両者には共通点も多く、比較研究すると面白い。本稿では、まずは、そんなモダニズム周縁に存在した、一見、縁もゆかりもない東洋と西洋の若者たちの人生が1903年、ロンドンでほんの一瞬、交差し、ノグチがコールマンの小雑誌に投稿することになった経緯を辿る。それにより、十九世紀末から二十世紀初頭に共に「アウトサイダー」として白人社会を必死に生き抜くため、いかに二人が互いの存在価値を認め、上手く利用する関係にあったかということ、*The Green Sheaf* 誌に投稿されたノグチの三篇の詩を手掛かりに考察していく。

「パメラ・コールマン・スミス」と「ヨネ・ノグチ」とは

おそらくコールマンとノグチには少し前置きが必要かもしれない。それぞれの生没年を先述したが、両者はほぼ同時代を生き、二つの大戦を経験した。文化史上「モダニズム」のど真ん中を生きた世代であるが、共に文学史や芸術史に必ず出てくるようないわゆる大御所ではないからである。

コールマンは1878年、名家出身のアメリカ人の両親の元に一人娘としてロンドンで生まれた。両親の出入国記録や「Colman」という姓からおそらく父方、母方共にジャマイカ出身だろうと推測されている。コールマン誕生後、父の勤務地がニューヨークになるが、その会社が倒産。自己破産した一家は1889年、逃げるようにジャマイカへ移った。それでも現地の縁故関係を伝手に一家は上流の暮らしを続け、それから七年間、彼女はジャマイカとニューヨークを行ったり来たりする青春時代を送るようになる。母方の祖父母の影響からか、彼女は幼年期から神秘的な妖精物語や絵を描くことが大好きな少女であった。ジャマイカとの往復生活の中、ニューヨークの美術学校に通い、才能を認められるものの、当時、男性権威主義の出版業界の中で女性イラストレーターが食べていくのは難しかった。そんな彼女に二十世紀の幕開けと共

に転機が訪れた。1896年には母を、1899年には父を相次いで亡くした彼女が母代わりに慕ったのがシェイクスピア劇で有名な舞台女優エレン・テリー (Ellen Terry) だった。シャーロック・ホームズが当たり役となったコールマンの父方の従兄ウィリアム・ジレット (William Gillette) を通しニューヨークで巡業中のテリーと知り合い、衣装やステージデザインを手掛けるようになる。テリーはコールマンにジェンダーレスな「妖精」を意味する「ピクシー (Pixie)」というあだ名をつけ可愛がった。父の死後、親交を深めた二人がニューヨークから故郷イギリスへと戻ったのが1900年、コールマンが二十二歳の時であった。この帰郷が彼女を最も有名にした一大プロジェクトに導くことになる。まず、テリーの息子ゴードン・クレイグ (Gordon Craig) を通してアイルランド文芸復興運動を知り、イエイツ一家と親睦を深めることになる。W. B. イエイツ (W. B. Yeats) はコールマンが手掛けたアビー劇場の舞台デザインとミニチュア・シアターを称賛し、コールマンはイエイツの描くケルトのスピリチュアルな世界に魅了された。1901年、先にメンバーであったイエイツを通し、魔術結社「黄金の夜明け団 (The Golden Dawn)」に入団する。そこで、主要団員であり著名なオカルト主義者アーサー・エドワード・ウェイト (Arthur Edward Waite) 監修のもとコールマンが七十八枚のタロットのデザイン画を描いた。これがのちに「The Rider-Waite Tarot」(昨今ではようやく画家コールマンへの敬意を込めて「Smith-Waite Tarot」と呼ばれるようになった) という1909年の発売以来、世界最大のベストセラータロットになったのである。そのため、一般的にコールマンの名はこれまでもオカルト界ではよく知られていたが、生前は富と名誉には一切縁のない人生であった。タロット画にしても現在のようないん税やロイヤリティー契約という概念もなく、当時、ほんの僅かな報酬で引き受けた仕事であり、常に経済的には貧窮しており、1951年、七十三歳で亡くなった際には文字通りの一文無しで埋葬料もなかったという (O'Connor 175, 240)。

このようなコールマンの人生が明らかになってきたのも、今世紀に入ってからのことである。2003年にカプラン (Stuart R. Kaplan) がタロット書 *The Encyclopedia of Tarot, Volume III* においてコールマンの人生と作品について言及したことを皮切りに、徐々に彼女の画家ばかりでなく作家としての才能や婦人参政権運動における社会的活動や貢献に関心が寄せられるようになった。2021年にはオコナー (Elizabeth Foley O'Connor) が著書 *Pamela Colman Smith: Artist, Feminist, and Mystic* で初めて文学的にコールマンを研究しモダニズム初期のフェミニストのアーティストとして位置づけた。

ヨネ・ノグチもまた今世紀に入りその研究が大いに深められたモダニストの一人であるが、彼はコールマンとは違い存命中に十分な脚光を浴びた。1875年 (明治八年)、愛知県で生を受けたノグチは自伝によると学校での英語教育に加え、幼少期から商人である父親に買い与えられた洋書などで英語に慣れ親しんでいた (Noguchi, *Story* 1-6)。英語圏という未知なる世界に心躍らせた少年は、十四歳で上京した後、慶應義塾大学で経済や歴史を学ぶが、英文学を読み続けたいという強い気持ちから間もなく中退してしまう。その後、ノグチの寄宿先であった志賀重昂のもとを訪れた、アメリカから一時帰国していた菅原伝の話聞くうちにアメリカへの強い憧れに突き動かされ、1893年、渡米を決心する。着の身着のまま単身サンフランシスコに到着したのは、彼が十八歳になるわずか一ヶ月手前だった。渡米後、しばらく皿洗いで生計を

立てたのち、1895年から老詩人ウォーキン・ミラー（Joaquin Miller）の山荘で書生として住まいした。これだけでも相当な行動力であるが、アメリカ到着から三年後の1896年には二十一歳にして日本人初の英詩集 *Seen and Unseen* を「Yone Noguchi」名義でサンフランシスコから出版。1902年にはこれまた日本人初となる英語による小説 *The American Diary of a Japanese Girl* をニューヨークから出版した。それでも米国だけでは飽き足らず、遂に彼は憧れ続けた英文学の本場ロンドンに赴き1903年に英詩集 *From the Eastern Sea* を自費出版した。ここまで立て続けに成功した要因の一つには、当時の文化的な潮流に上手く合致したこともある。十九世紀中頃から、アメリカは文化的にも文学的にも、ヨーロッパ諸国の、特にイギリス文学と比べ、歴史が浅く、文化的後進国としてのコンプレックスから、イギリスとは異なる独自の文学を模索する時期にあった。詩人と言えばオックスフォード出身のエリート紳士だけの専売特許であるかのような雰囲気を買拭し、アメリカ文学にはその建国精神に基づき自由とフロンティアの精神が歓迎された。そこで、十九世紀末から西海岸ではボヘミアニズムが、東海岸ではジャポニズムやオリエンタリズムがアメリカ国内でも対抗し合うように隆盛した。イギリスに至ってはノグチが到着した1902年には極東進出をはかるロシアを牽制し、中国における日本、イギリス両国の利益を擁護するために日英同盟が締結したばかりで、日本人を歓迎する雰囲気にあった。しかし、こうした文化的背景があったとはいえ、二十世紀に入ってからも多くのアジア系移民は日々の労働に疲弊し、貧困の中、白人社会に埋もれていった。そんな中、米英でノグチがここまでの成功を取めたのは驚くべきことであり、昨今ではその理由を文化的背景や歴史的要因に求めるばかりではなく、彼の作品の文学的価値を再評価し始めている。日本のモダニズム文学におけるノグチの影響や、また日本と米英の懸け橋となった文化人としての功績に光を当てる精力的な研究が国内外で盛んになってきた。十三年に及ぶ米英の生活では多くの作家や著名人と交流を持ち、帰国後は慶應義塾大学で英文学を教える傍ら詩作や文学論の執筆を続け、英語と日本語を合わせると著書は二百冊近くになるという（星野 19-20）。これほどセンセーショナルで多産な詩人でありながら、1947年の没後から彼の名は一般的には息子であり世界的な彫刻家「イサム・ノグチの父」として広く認識されているのも事実である。

人生を賭けた1903年 1月

コールマンとノグチの比較で特筆すべきキャリアは、二人共、自身が編集長となり雑誌を創刊した経験があることと、「1903年 1月」は両者にとって人生の節目になったということである。

自伝によるとノグチがロンドンについたのは1902年11月であるが（Noguchi, *Story* 119）、それまでにアメリカで成し得た業績は多い。第一詩集 *Seen and Unseen*（1896）に次ぎ、第二詩集 *The Voice of Valley*（1897）をサンフランシスコで出版した直後、1898年にはノグチは自らが編集長となり *The Twilight* という小雑誌を発行した。たった二号で廃刊することになったが、この雑誌もコールマンの *The Green Sheaf* 誌と同様、*The Yellow Book* 誌的な雰囲気を持つ雑誌であり、決して日系コミュニティーやジャポニズムを意識したものではなく、「詩や芸術の活動を現実社会の中からいっそう喚起しようとする試み」であったそうだ（堀 63）。

彼は渡英直前には初小説を「Morning Glory」というペンネームで *The American Diary of a Japanese Girl* (1902) をニューヨークで出版した。サンフランシスコからニューヨークに至るまで広くアメリカで認知されるまでになっていたにもかかわらず、野心家ノグチはどうしても英文学の本場「ロンドン」で成功しなかった。しかし、現実は厳しかった。イギリスでは無名の日本人が、それまで書き溜めておいた詩集を持ってロンドン中の出版社を渡り歩いても相手にされなかった。そこで彼はパリで過ごすクリスマス休暇のために取っておいたなけなしの金、三ポンドをはたいてたった八編の詩を十六ページの小詩集にした *From the Eastern Sea* を1903年1月、自費出版した (Noguchi, *Story* 127-28)。印刷した二百部から恐る恐る英国のメディアと、権威ある作家たちに小冊子を送ったところ、翌日から大きな反響があった。トマス・ハーディー (Thomas Hardy) やコナン・ドイル (Conan Doyle)、ジョージ・メレディス (George Meredith)、マックス・ジモン・ノルダウ (Max Simon Nordau) などの小説家や詩人、エレン・テリー、文芸批評家のウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti) などから続々と手紙が届き、イエイツなど名だたる文化人からも連日のように招待され、文芸雑誌にも取り上げられノグチは歓喜したそうだ (星野 113-14。堀 80)。

一方、コールマンは1900年にニューヨークから生まれ故郷であるイギリスに戻り、イエイツ一家と親しく付き合うようになっていた。イエイツの弟であるジャック (Jack B. Yeats) とも意気投合し1902年から *A Broad Sheet* という言葉通り一枚紙面の出版物を共同編集するようになった。しかし、紙面を飾る絵の色付けを全て一人で手作業でやっていたため疲労困憊していた彼女に対し、ジャックは女性蔑視的な態度を示したことから、二人は衝突し、一年ほどで彼女はこの仕事を辞めた (O'Connor 115)。不満と悔しさを胸に、1903年1月、W. B. イエイツに相談しながら、彼女は自らが編集、出版まで行う小雑誌 *The Green Sheaf* を創刊する。*A Broad Sheet* と同じく、手作業による塗り絵にこだわった。値段は当時、所属していた「黄金の夜明け団」がラッキーナンバーとしていた「十三」にちなんで、この雑誌を一冊十三ペンス、という高値に設定した。この雑誌のコンセプトである「夢」や「超自然的」な世界観に合わせ、第二号にはイエイツも “Dream of the World's End” という小エッセイを、第三号にはアリックス・エジャートン (Alix Egerton) やアーネスト・ラドフォード (Ernest Radford) が神秘的な詩を寄せている。イラストはコールマンとセシル・フレンチ (Cecil French) が担当。劇団関係では、友人の舞台俳優であり演出家でもあるクレイグや、作曲家マーティン・ショー (Martin Shaw) によるパフォーマンスの宣伝をしたり内容もあり華やかであった。しかし、それも1903年の最後に発行された第八号目くらいまでで、ページ数もそれまで十五ページ以上はあったものが、1904年に入り第九号では十二ページ、第十号目以降は最終号を除き十ページを切っている。かなり高額なこの雑誌の売り上げは芳しくなく、次第に紙面を埋める投稿者にも困っていたようで、中にはコールマン自身が偽名を使い投稿した詩もあるのではないかと O'Connor は推測している (119)。

ノグチとコールマンの出会い

以上のように、二人は1903年1月に人生の勝負に出たわけだが、ノグチの詩が *The Green Sheaf* 誌に登場するのは、まさに雑誌が終焉を告げる直前のことであった。1904年の第十一号に「The Violet」、第十二号に「Evening」と「Mugen」という彼の詩が掲載されている。そして次の第十三号をもって廃刊となった。気になるのは、コールマンとノグチの二人の接点である。時期としては、ノグチのロンドン滞在期間である1902年11月から1903年3月までの間に出会ったと考えられる。二人を結びつける人物としては、他にエレン・テリーやイエイツなどの可能性もあったが、Marxによると、ノグチとコールマンを引き合わせたのはおそらく画家の牧野義雄だろうと推論している(288)。

牧野は1869年(明治二年)現在の愛知県豊田市に生まれ育ち、教員として生計を立てていたが、二十四歳になる1893年、ノグチと同じ年に、英語で詩や小説を書きたいと思立ち、単身、サンフランシスコに渡米。のちに二人はサンフランシスコの日本人コミュニティの中で交友関係を深めていく。しかし、ノグチと違い、牧野は本場の英語圏で物書きになるのは無理だと諦め美術学校に通い始めたが、当時のサンフランシスコでの日本人に対する差別の酷さに辟易し、渡米から四年後の1897年ロンドンに居を移す。ノグチより五年早く渡英していたことになる。憧れの英国に足を踏み入れたものの右も左も分からぬノグチにとっては、先に人脈を広げていた同郷の牧野を頼りに夢のロンドンでの文壇デビューを果たすことになる。

一方、コールマンは1901年からロンドンのサウス・ケンジントンにスタジオを構え、そこに毎週、芸術家や作家、俳優らを招き交流を深めていた。訪問者リストにはイエイツやフロレンス・ファー(Florence Farr)、ホートン(W. T. Horton)など多くの「黄金の夜明け団」のメンバーの名前がある。そこでは、互いの活動を報告したり、コールマンは青春を過ごしたジャマイカで見聞きした民話を著した *Annancy Stories* や、イエイツの詩の朗読などを披露したようだ(O'Connor 184-85)。これは、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)らを中心とする「ブルームズベリー・グループ(Bloomsbury group)」さながらのサロンだったことが窺える。

この集まりにおいて、牧野はのちに「ランサム・サーガ」シリーズで児童文学作家の地位を確立し、ジャーナリストになったアーサー・ランサム(Arthur Ransome)をコールマンに引き合わせている(Ransome, *Autobiography* 87. *Bohemia* 51-66)。当時、出版社で助手として働いていたランサムはボヘミアンの生活を送る芸術家たちに憧れていた。二十歳にもならぬ貧しいランサム青年にとっては、日本から来た自分より十歳ほど年上の牧野やノグチに対し、「mentor」と感じるほど強い憧れを抱いていた(Marx 287-88)。実際、ノグチの *From the Eastern Sea* の書評を読んだランサムはわざわざロンドンのノグチの下宿先に本を買いに行った。ちょうど牧野もその場に居合わせ、ランサムとノグチと牧野は意気投合し親交が始まったという(堀 80)。このような経緯で、牧野を通してノグチがコールマンと知り合ったのは最もあり得そうな可能性である。かくして遙か「東海」からやって来た男は西洋のボヘミアンに奇跡的に出会い、ごく自然に *The Green Sheaf* 誌への投稿へと至ったように思われるが、その背景には、彼の巧みな生き残りをかけた戦略が見え隠れすると同時に、その野心がコールマンにとっては助けとなっ

たことが見えてくる。

短期間のロンドン滞在

ノグチにとっての *The Green Sheaf* 誌への投稿の意義を探るためには、ロンドンでの滞在期間を観察する必要がある。まずはタイムラインを整理しておきたい。ノグチの三篇の詩が発表されたのは雑誌の第十一号、第十二号であるので1904年に入ってからのものであるが¹⁾、しかし、この時、ノグチはもうロンドンにはいない。彼は1903年3月にイギリスを出港し4月上旬にはボストンに戻っている（星野 135）。1903年、コールマンが雑誌を立ち上げ、ノグチが *From the Eastern Sea* を出版した直後に二人が出会っていたとしても、詩の掲載までには一年ほどのブランクがある。この間、二人に何が起こっていたのか。鍵となるのは、双方を取り巻く環境の変化であり、当時の経済状況が互いの存在価値を高める要因の一つになっていることが分かった。

この時期、コールマンは資金繰りに苦労していたようだ。1903年出版の第四号の *The Green Sheaf* 誌では、自分が描いたテリーの色付き肖像画を売り出したり、塗り絵教室を始めたという広告を出し始めたりしている。1904年の第九号ではイエイツの肖像画も売り出している。おそらくこの雑誌では投稿者への原稿料も多くなかったはずであるが、そのせいで投稿者が集まらなかったのか、はたまた問題は原稿料ではなく、この雑誌の空想的な世界観が敬遠されたのか、とにかく紙面には匿名を含む常連ばかりが目立ち、収録ページ数も号を追うごとに激減していった。金銭面の苦労はコールマンの雑誌編集への意欲も衰退させてしまった。当初は一年に十三号出版することを謳っていたが、第九号で、第十三号をもって「第一巻」を終了とし、その後は年四回の季刊誌にすると告知している。

一方、ノグチもなけなしの金をはたいて *From the Eastern Sea* を自費出版した後、文壇から思わぬ好意的な反響を受け喜びと自信に満ち溢れていたが、懐事情は心もとなかった。ノグチの日記調の回顧録『英米の十三年』ではロンドン滞在中の多忙ぶりが窺える。*From the Eastern Sea* が刷り上がった1903年1月12日から2月13日までは毎日のように著名人の家に招かれたり、雑誌記者が訪問してきたり、演劇鑑賞したりと大忙しだ（26-45）。憧れのロンドンでこれだけの名声を残しながらも、ノグチの英国での滞在期間はわずか四ヶ月ほどで1903年3月下旬に再びアメリカに戻る。ここまで短期間であった理由について、星野は一つ目に念願の英国での英詩集出版の夢が叶ったこと、二つ目に旅費が底をついていたこと、三つ目に渡英前、アメリカに残してきた恋人の米国人女性記者エセル・アームズ（Ethel Armes）（イサム・ノグチの母親ではない別の女性）が気がかりだったことを挙げている（130-31）。これら全ての理由が複雑に絡み合った結果なのだろうが、星野は彼の手紙から特に金銭面での不安に注目している（132）。アメリカの再入国の際、特に二等船室でやって来た外国人に必要とされるまとまった資金がないことを不安に思ったノグチはアメリカ人の友人に身元保証人としてボストンの港まで迎えに来て欲しいと伝えている。手紙の内容から、この時、当時の40ドル（現在でいうと約1250ドル）²⁾ の金も持ち合わせていなかったということからも、コールマン同様、経済的に切羽詰まった状況にあったことが英国を後にした大きな要因になったことは確かだろう。

「The Violet」掲載まで

ロンドンを後にしたのち、ノグチがどのようにしてコールマンと連絡を取り合い、詩の掲載に至ったのか、はたまた、ロンドン滞在中にもうすでに彼女に詩を託していたのか詳細は不明である。しかし、筆者は以下の理由から、おそらくノグチはロンドンを去った後、アメリカから詩をコールマンに送ったのではないかと考える。なぜなら、雑誌の創刊当初から、金策に走り、投稿者不足から紙面を埋めるのに必死であったコールマンが、もし、ノグチから詩を預かっていたら、すぐにも彼の話題性があるうちに載せてしまいたいと思うのが編集者の本音ではないだろうか。あくまで、これは推測の域を出ないのだが、次に挙げるノグチの手紙からは少なくとも彼が寄稿した三篇のうち「The Violet」という詩は、おそらくアメリカに帰国後、コールマンに送ったのではないかと考えられる。

ノグチはアメリカに帰国後ニューヨークから、後にイサム・ノグチの母親となるレオニー・ギルモア (Leonie Gilmour) に1903年7月5日付の手紙で、こんなお願いをしている。“Say, Leonie, do you remember that you did not give me a copy of the “Violet” (a poem of some misty night)? Will you hunt it up, and send it to me?” (Noguchi, *Letter* 125)。ここでノグチが欲しがっている「Violet」とは、ある霧の夜を描いているということからも、明らかにこれは *The Green Sheaf* 誌に掲載された詩のことである。アメリカ時代に書き溜めていた詩の一つだったのであろう。ちなみに、ノグチは1901年に初の小説となる *The American Diary of a Japanese Girl* の出版以来、英文添削や編集の他、公私ともに彼を支えてくれていたギルモアとは恋仲になっていた。しかし、この時には婚約者同然のアームズがいながらも、この詩を是が非でも「hunt it up」探し出して送って欲しいと頼んでいるのである。この手紙ばかりではなく、ノグチは男女問わず悪びれることなく結構厚かましいお願いを平気とするのだが、不思議にもそれが受け入れられることが多い。

今回のギルモアへのお願いも受け入れられた。「So kind of you! Really you are.」で始まる9月17日付の手紙に綴られる謝辞から、おそらくギルモアは「The Violet」を探し出し送ってやったようだ (Noguchi, *Letter* 136)。続けてノグチは「Are you deadly tired of me? Are you really? I shall say that it would be the time when I must make a graceful exit. (Oh, if possible!)」とおどけた調子で別れたはずの恋人に詫びを入れている。しかし、結局1904年11月には彼女との間にイサムが誕生した事実からも、この後、ノグチがギルモアと関係を持ったのは明らかである。「I am something like jelly fish which has no head and tail. I don't know what I am going to do. Just I am contemplating—about what? God Knows」と自身の手紙で述べているように、全く女性関係についてノグチは「クラゲ (jelly fish)」のように捉えどころのない男だったのかもしれない (Noguchi, *Letter* 136)。

この手紙の半年ほどあと、ギルモアが見つけてくれたであろう「The Violet」はとにかく無事コールマンの手に渡り1904年に出版され世に出た。ノグチは女性関係もさることながら、彼のイギリスの文壇に対する執念や出世への野心にも「a graceful exit」などなかったのではないだろうか。そこから「立ち去りたい」とも思っておらず、「神のみぞ知っている (God Knows)」

という彼の「思惑 (contemplate)」とは、諸事情によりやむを得ずロンドンから去ったものの、今なお出来る限り英国の文壇に自分の爪痕を残してやろうとする野心だったのではないのか、とロマンスとはかけ離れた深読みをしてしまう。

The Green Sheaf 誌の意義

以上のような経緯を経て、ノグチが「The Violet」、「Evening」、「Mugen」という詩を一篇ずつコールマンに送ったのか、それとも三篇まとめて送ったのか定かではないが、「The Violet」は雑誌の第十一号で、他二篇は第十二号で発表された。結果的にこれらの詩は、ノグチが編集者コールマンに、またコールマンが詩人ノグチに対して一役買ったということになるのだ。

第一に、このノグチの投稿は、経営困難で毎号の紙面埋めに必死だった編集長コールマンにとって、話題性のある日本人詩人が雑誌のテーマに合った幻想的な世界観に花を添える有難い存在だっただろう。当然、紙面を埋めてくれるのなら誰でもよかったという訳ではなく、またノグチのことを英米で話題になった日本人詩人として鳴り物入りで掲載した訳でもない。ノグチの「The Violet」を読むと、コールマンが求めた神秘主義的価値観を彼なりに趣向を凝らし解釈しているのが読み取れる。

「The Violet」における語り手は冒頭「breezes」「mists」「star」などの自然に自らの哀感を投影している。彼には通り過ぎる人々の顔も「phantoms」のようにしか見えず、それが現実か幻か分からない。そこへ突如として（「another happier world」という言葉から）おそらく亡くなった「Yen」という名の恋人の顔が突然、現れるが一瞬で消える。残された「a bunch of violets」に「Yen's soul」を重ね合わせ、甘美な過去に感傷的になる語り手を描き詩は終わる。まるで形見のように残された「violets」は、現代における悲恋の代名詞とも言える「勿忘草」(forget-me-not)を喚起させる花の象徴のように捉えられる。ノグチは1913年にはイギリスを再訪することになるが、この時点では、「The Violet」は名残惜しいロンドンの文壇に自分の存在を忘れないでくれと言わんばかりにコールマンに託された花のようにも感じられる。

「The Violet」を所収した *The Green Sheaf* 第十一号は、このような超自然的な幻想や夢、過去や死、思い出などについて時に中英語などを用いて表現する神秘主義的な要素が強い。雑誌全体のテーマに掲げられた神秘主義や象徴主義について述べておくと、十九世紀末のヨーロッパ文化には受け入れられやすい土壌があった。文学や絵画を含む既存のヨーロッパ文化は、これまでの既存価値や慣習に囚われることなく新しい流れを取り入れようとしていた。鏡は、コールマンも属していた「黄金の夜明け団」の母体ともいえる薔薇十字運動の誕生の背景として、十九世紀後半のヨーロッパでは、唯物論的思想への反発と、キリスト教の衰退により、神秘、秘教的な思想が受け入れられやすかったことを挙げ、象徴主義もその流れと無関係ではなく、幻想、神秘、退廃といった言葉で形容される作品が数多く生み出されていたと関連付けている(85)。ゆえに、当時の文芸雑誌におけるコールマンと *The Green Sheaf* 誌に対する「strange」という形容と評価は当時の文化や芸術的な流れからしても正しいとは言えない³⁾。*The Green Sheaf* 誌にはコールマン自身の超自然的な世界観への憧れと個人的な興味が強く反映されているが、このような「strange」として捉えられる思想や世界観が主流ではなかったとしても、それが興

隆しつつあることをコールマンも意図して作り上げていた可能性も忘れてはならない。

ノグチが神秘主義をいかに意識し精通していたかについては、堀は「一九〇三年十二月末に、トラウベルと野口が、神秘主義に傾倒する民族運動家ウィリアム・シャープのホイットマンへの関心について語り合った」ことに注目している(93)。ホイットマン(Walt Whitman)の研究雑誌の主筆であったホーレス・トラウベル(Horace Traubel)と語り合った、ウィリアム・シャープ(Wiliam Sharp)とはスコットランドの作家、文芸批評家でオカルト的な神秘主義や心霊実験に傾倒していた人物であり、ノグチは*From the Eastern Sea*の出版後に手紙を受け取っている。こうした交流から「The Violet」をコールマンに託した時点では、ノグチもイギリスの神秘主義を意識するに足る知識を持っており、コールマンも申し分ないクオリティーで描かれた神秘的な詩に納得の上、掲載に至ったはずである。

第二に、ノグチにとっての*The Green Sheaf*誌の存在意義についてであるが、経済的理由からややむなくロンドンを離れざるを得なかった彼にとっては、資金と労力をかけずに英文学の中心地ロンドンで「詩人」として作品を発表し続けられる格好の受け皿だったのではないかと考えられる。結果、それが同世代の若きアーティストの一助となるのであれば一石二鳥だったのではないだろうか。自身も同じような志を持って*The Yellow Book*誌的な雑誌を創刊し、継続の苦勞を知っているノグチにしてみればなおのことである。そう考えると、*The Green Sheaf*誌におけるノグチの詩は、彼自身にも、またコールマンにとっても大きなメリットがあったのだが、ノグチにとってのこの雑誌の存在意義の方が若干大きかったように思える。なぜなら、確かに、ノグチは日本に帰国後も精力的に英米の新聞雑誌に数多くの英文記事を投稿しているが(堀 134-49)、その執筆活動は主として「詩人」としてではなく日本文学や美術を批判、紹介する「ジャーナリスト」的視点から書かれた「論文」が多く、作家でも記者でもなく「詩人」としてロンドンの雑誌に投稿できる機会は貴重だったはずだと考えられるからである。

ノグチは詩人としてのプライドや使命感を著書『藝術の東洋主義』で以下のように語っている。彼は、日本には日本特有の自然や、それに対する情景を有していることを了解した上で、「何も日本の感情思想でも悉く外国で語られないとは限らない。私は世界的でしかも立派に日本的である詩の情緒だけを歌ふ事を目的としてゐるものだ。何も無理に翻譯出来ないものを外國語に直してみる實務的翻譯者ではない低級な文學労働者でない」(47)と断言している。つまり、どうしても日本語には英語に訳せない情緒的なものが多いが、その全てを分かってもらおうと説明するつもりもないし、ましてや自分は一語一句、英語に変換していく「翻譯者」ではないのだから、その詩が日本語であれ英語であれ、人種を問わず人の中に存在していると思われる普遍的な感覚や情に訴えかけることを詩人としての信条としていることが窺える。1903年、イギリスから帰国した後も、ノグチはこの信念を過去三十年間、詩歌に対し持ち続けていることを同書で明かしている(47)。

*The Green Sheaf*第十二号に掲載された「Mugen」は、そんなノグチの詩人としての信念を實踐した数多くある詩の一つである。第十二号では象徴主義的な印象が強く、どの掲載詩を読んでも、タイトルと内容が容易には結びつかない。作者の内面的な観念や感覚を表すために使われているのは言葉に付帯する直接的かつ客観的な定義や意味ではなく、その言葉の響きや、

そこから連想させる詞が多いことに気付く。ノグチは日本人にとっての「無限」は「eternity」でも「unlimitedness」でもない概念として伝えたかったのだろう。言葉では言い表せないからこそ、Mugen というタイトルの下に副題のように (without words) と付したのだろう。「without words」は決して「無限」の意味の説明にはなっていないが、確かにこの詩の世界観を構成しているのは言葉ではなく色彩であるように感じる。言葉面だけ読んでいても意味が上手く取れないが、「carnations」や「roses」などの暖色系の色の花に象徴される「Poet」と、寒色系の「purple forgetfulness」にいる主人公「I」と、中性色の「the moon」が三位一体になり一つの「Universe」となる視覚的イメージが朧気ながら浮かぶ。しかし、これが日本語の「無限」の概念を言い表しているかといえば謎である。堀は「野口のすべての英詩が、完成度の高い英詩、象徴主義として成功していたとは決して言えない」(101)と評する最たるものだ。詩の理解のしやすさからいえば、このノグチの「Mugen」の次のページに掲載されているコールマンの「The Town」という詩の方がよほど明快にデカダンス的な「ennui」な世界観が象徴的に表現されている(O'Connor 123-24)。ちなみに、この号にはもう一つ「Evening」というノグチの詩が掲載されているが、*From the Eastern Sea*にも同タイトルの詩が所収されている。ただし、これらは全く違う内容の詩で、後者の詩の方が象徴主義的に囚われすぎておらず理解しやすいことも追記しておく。しかし、英語話者からすればノグチの英語が多少ぎこちなく理解が困難であっても、むしろその曖昧さがより一層、西洋文化においては新鮮に映り日本文化の特有の感性として受け入れられたのかもしれない。このような背景を見越して、ノグチはロンドンを離れてもなお *The Green Sheaf*誌を通して「詩人」として日本の情緒を発信し続けたとも考えられる。

オリエンタリズムと文化盗用

このようにイギリスから帰国後も *The Green Sheaf*誌を通し詩人としての信念を貫き通すノグチにはもう一つの目論見が見えてくる。「Mugen」をはじめとする日本語をタイトルとする彼の詩には「詩人」として名声を挙げるためには西洋社会における日本文化に対する誤った認識に対し、あえて甘んじて受け入れようとする姿も見えてくる。「Mugen」だけではなく、ノグチが米英滞在時に発表した英詩には「日本らしさ」が過分に強調されているのは言うまでもない。そもそもジャポニズムと呼ばれる日本ブームは主に浮世絵や陶器の絵柄などの西洋とは違う独特の構図や色彩に衝撃を受けたフランス画壇において十九世紀後半から巻き起こった。アメリカにもすぐに飛び火し、コールマンも1895年には師匠であるアーサー・ウェズリー・ダウ (Arthur Wesley Dow) からブルックリンにある美術学校のプラット・インスティテュートで彼が傾倒していたジャポニズムの「濃淡」技術を学んだ。また、ダウが招待したアーネスト・フェノロサ (Ernest Fenollosa) による学内講演にもコールマンが参加していたことから (O'Connor 104)、彼女は日本美術や文化が注目されている芸術であることをニューヨークにいる時から十分に理解し影響を受けていたのである。二十世紀初頭のイギリスにおいては美術ばかりではなく、文学においても日本的要素への関心が高かったことが、ノグチの執筆活動からも明らかである。

ノグチはアメリカ時代からジャポニズムの「恩恵」を受けていたが、アメリカ人の日本に対

する誤った理解に対し批判的眼差しを持っていた。1887年には、フランス人作家のピエール・ロティ (Pierre Loti) が『お菊さん (*Madam Chrysanthemum*)』を、アメリカでは1898年にジョン・ルーサー・ロング (John Luther Long) が『蝶々夫人 (*Madame Butterfly*)』を発表した。次々に欧米で日本を題材にした小説が発表される中、ノグチは著書 *The American Diary of a Japanese Girl* においてアメリカ人が抱くステレオタイプな「まがい物」の日本人女性像を皮肉って否定していると羽田は指摘する (235-36)。ここでは、その日記調小説でノグチがいかにしてアメリカの誤った日本文化の認識に抗議したかについては割愛するが、これはまさに、しばしば翻訳の分野に起こるとされている「文化の盗用 (Cultural appropriation)」にノグチが敏感に反応したことの表れと言えるかもしれない。ノグチにとって『お菊さん』や『蝶々夫人』における欧米人による日本文化の誤用は Sanders の定義する「脚色 (adaptation)」の度を越す「盗用 (appropriation)」に値するものだったのだろう (35)。Sanders によれば「adaptation」とは、例えば、元は舞台用の脚本であるシェイクスピア (William Shakespeare) の *Hamlet* を題材に英語で映画版を作成しても、それは「脚色 (adaptation)」であり、映画化されても『ハムレット』というオリジナルの「情報源となる原文 (informing source text)」と密接な関係を持ち続けている。しかし、「appropriation」になると、オリジナルのテキストから遠くかけ離れ、もう文化的にも全く違う作品 (a wholly new cultural product) になってしまい、ジャンルさえ変わってしまうような解釈をされてしまうことを指す (Sanders 35)。ノグチからすれば、当時の西洋文化における日本文化の扱いは「脚色 (adaptation)」でも、「評価 (appreciation)」でも、「影響 (effect)」でもなく、明らかに「盗用 (appropriation)」であると反論に出たのだ。

しかし、ノグチの場合、この文化盗用に反論する場はあくまで小説や日本文化についての論文など「散文」に限られている。詩人・ノグチには、批判を通り越しこの盗用を黙認した上で、あえてそれを自らの立身のために利用する巧みさが見え隠れする。特に憧れのロンドンに出てきてからはその傾向が顕著だ。イギリスでの初の詩集 *From the Eastern Sea* を自費出版した際には、著者名の「YONE NOGUCHI」の下にわざわざ (JAPANESE) と記した。異国情緒たっぷりのタイトルに加え、わざわざ日本人であることを全面的にアピールしている。反響を得たこの詩集は1903年3月に同タイトルで三十六篇の詩を所収しユニコーン・プレスから再販され、牧野が表紙の絵を描いた。その中には「O Cho San」、「O Hana San」、「O Haru」、「Tsune」などの女性名の他、「Adress to a Soyokaze」、「The Myoto」、「Homekotoba」などの日本語をそのままローマ字表記にしたタイトルの詩が目立つ。“‘Soyokaze’ is ‘zephyr’ in Japanese” (14)、“‘Myoto’ is Japanese for ‘couple’ in English” (16)、“‘Homekotoba’ means ‘praising words’” (21) と語釈が添えられているが、内容は「Mugen」と同様、例えば「夫婦 (みょうと)」と「couple」がニュアンス的にどう違うのか、わざわざ日本語表記にする必要があったのか疑わしい。これらの単語は外国人が発音しづらいためであろう促音便や撥音便、イ音便などをなるべく避けたようでもあり、これらの詩には、日本特有の概念を象徴的に表し、洋の東西に拘わらず読み手の普遍的な情感に訴えたいという詩人としての信念というより、亀井が指摘するように「日本的なエキゾチシズムを押し出し、印象主義表現で夢幻美のようなものを散りばめている」だけの印象さえある (『ヨネ・ノグチの英文著作』26)。その証拠に、*The Green Sheaf* 誌に投稿した詩の

うち日本をモチーフにしていない「The Violet」は1905年に日本で発表された *Japan of Sword and Love* にそのまま収められることになるが、他、後に日本で発表された英詩集にローマ字表記の日本語タイトルの詩は激減する⁴⁾。これは明らかに彼が読者の洋の東西を意識しているということである。彼の人生には、長きに渡るアメリカ生活で目の当たりしてきた日本の文化盗用に反論するジャーナリスト的視点を持つ「作家・ノグチ」と、それを迎合するかのようにオリエンタルな風情を持つ日本語の持つ優美な響きを象徴的な詩で紹介する巧みな「詩人・ノグチ」が混在している。

このようにノグチにとって *The Green Sheaf* 誌は、詩集の自費出版後、再度、イギリスでジャポニズム的な詩を投稿する場として、またコールマンにとってもノグチの詩の掲載はオリエンタリズムの流行を取り入れる紙面に花を添える形になったのである。ジャポニズムやオリエンタリズムなどの非西洋への関心の高まりは、イギリス文学においてはイングランド以外の支流とされていた文芸への注目にも通じる。イェイツをはじめとしたアイルランド文芸復興や、前述のウィリアム・シャープ率いるスコットランド系のケルト復興運動がその最たるものである。*The Green Sheaf* 誌におけるコールマンのオリエンタリズムは第四号から見受けられる。ローレンス・アーヴィング (Laurence Irving) による「Prince Siddhartha」というインドの釈迦族の王子としての誕生から出家までを描いた話を掲載し、セシル・フレンチと共に挿絵を施している。第十二号にはノグチの「Evening」と「Mugen」に続き、「Aithne」「Dermid」というフレンチによるアイルランドやドルイド (Druid) をテーマにした詩を収めている。ノグチが音でオリエンタリズムを演出したのと同様、コールマンも読者の聴覚に非イングランド的な響きで訴えかけている。

このようにコールマンとノグチは *The Green Sheaf* 誌の誌面を通し、共に大変経済的に自分たちの理想を叶えたのである。ノグチにとっては、*The Green Sheaf* 第十一号において神秘的な詩を、第十二号においてオリエンタリズムと象徴主義を取り入れた詩を投稿することにより「詩人」としての存在感をロンドンに示し続け、またコールマンにとっても上手く時流に合った思い描いた誌面に編集することが出来たのである。

おわりに

ノグチは1921年(大正十年)に野口米次郎名義で『二重国籍者の詩』という詩集を出版し、「自序」で以下のように述べた。

日本人が僕の日本語の詩を読むと、
「日本語の詩はまづいね、だが英語の詩は上手だらうよ」といふ。
西洋人が僕の英語の詩を読むと、
「英語の詩は讀むに堪へない、然し日本語の詩は定めし立派だらう」といふ。

實際をいふと、
僕は日本語にも英語にも自信が無い。

云はば僕は二重国籍者だ……
日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲み……
不徹底の悲劇……
馬鹿な、そんなことを云ふにはもう時既に遅しだ。
笑つてのけろ、笑つてのけろ！

ここには青春から十年以上、主にアメリカで過ごした彼の言語能力をめぐるアイデンティティの不確かさが吐露されているが、ノグチにとっての *The Green Sheaf* 誌の意義をも集約しているともいえる。*The Green Sheaf* 誌には、イギリスから帰国後も国際的な詩人としての信念を貫き通したいという純粹かつ情熱的なノグチと、詩人として成功し名声を確立し続けるためには日本文化の盗用を「笑いのけ」迎合した野心的で「不徹底」なノグチが混在する。

アイデンティティが不確かであったのはノグチだけではない。コールマンも成長過程において複雑な環境に身を置いていた。彼女はアメリカ国籍の両親の元にイギリスで生まれるが、青春はジャマイカとニューヨークを頻繁に往復した。両親のルーツがジャマイカとされるため、彼女の容姿はジャマイカ人や黒人、またネイティブ・アメリカンや、日本人と描写されることもあった (O'Connor 6-12)。しかし、それを否定するでもなく、あえて着物風の洋服をまったり、頭にはジャマイカ風にターバンを巻いたりして異国情緒を演出して楽しんでいた。ノグチとコールマンは共にアイデンティティが常に曖昧であり、その恩恵と不利益を被った芸術家であった。ロンドンで1903年1月、コールマンは *The Green Sheaf* 誌を創刊し、ノグチは *From the Eastern Sea* を出版した。この人生を賭けた一大プロジェクトが始動し始める前、二人はまるで違う人生を歩んでいたが、1904年、*The Green Sheaf* という小雑誌で奇跡のコラボレーションを果たした。ノグチの英詩を掲載した第十一号、第十二号は、二重国籍者のノグチが国籍不明の女性アーティストの小雑誌に、詩人としての情熱と野心を披露するという、運命的に複雑に絡み合った面白い資料として読めるのである。この後、コールマンはノグチの戦略を踏襲するかのごとく、白人社会におけるジャマイカ文化の盗用を否定しながらも、自らの曖昧なアイデンティティを最大限に利用し、アフリカ発祥のジャマイカの民話「アナンシ物語」の本格的な朗読会を開始する。ノグチも日本への帰国後も英語と日本語で日本や欧米の文化や文学について発信し続けた。しかし、彼は戦時中の日本帝国主義を擁護したと非難され、これまで長らくアイデンティティも定まらない二流詩人として忘れ去られていた。コールマンにおいては、人種的曖昧さに加え、階級や女性というジェンダーの壁が彼女の人生とキャリアに大きく影を落としていたことを記して、これまで語られることのなかったヨネ・ノグチとパメラ・コールマン・スミスについての考察を終える⁵⁾。

註

- 1) *The Green Sheaf* 誌は第一号から第八号までが1903年出版、第九号から第十三号（最終号）が1904年出版とされている。
- 2) 1800年から2021年までの米ドルの価値は Friedan が作成したウェブサイト (<https://westegg.com>)

com/inflation/) で入力し換算することが出来る。なお、当時の船代はアメリカと日本の間の片道で100ドルくらいであるとノグチは手紙で記している (星野 169)。

- 3) “Art Notes” 参照。 *The Academy and Literature* の記事「Art Notes」では、コールマンの雑誌と彼女自身を再三に渡り「風変わり」だと評価している。例えば、“...*strange* little periodical ‘The Green Sheaf,’ published and edited and sold by the *strange* personality whom we call Pamela Colman Smith. I ought perhaps to add that some of the designs by far the best, are from her own *wibimsical* hands” (斜体部分の強調は筆者による) など。
- 4) 他、「The Violet」は *The Summer Cloud* (1906) にも同タイトルで違う詩になって所収されている (33-36) ことから、ノグチのお気に入りのモチーフの一つと言えるだろう。
- 5) コールマンがいかに人種、階級、ジェンダー的に「マイノリティー」に属し、それが社会的成功への障壁になったかということについては、角谷による O'Connor 著 *Pamela Colman Smith* の書評も参照されたい。

引用文献

- “Art Notes.” *The Academy and Literature*. 66. 1663. (1904): 307.
- Friedman, Morgan. *The Inflation Calculator*. Web. 19 Mar. 2022.
- Kaplan, Stuart R. *The Encyclopedia of Tarot*. Vol. 3. New York: U. S. Games Systems, 2003.
- Marx, Edward. *Yone Noguchi: The Stream of Fate*. Vol. 1. Botchan Books, 2019.
- Miller, Joaquin., and Yone Noguchi. *Japan of Sword and Love*. Tokyo: Kanao Bunyendo, 1905.
- Noguchi, Yone. *The American Diary of a Japanese Girl*. 1901. New York: Frederick A. Stokes, 1902.
- . *From the Eastern Sea*. London: n. p., 1903.
- . *From the Eastern Sea*. 2nd. ed. London: Unicorn Press, 1903.
- . *Seen and Unseen*. 1896. San Francisco: Gelett Burgess and Porter Garnett, 1897.
- . *The Story of Yone Noguchi: Told by Himself*. London: Chatto and Windus, 1914.
- . *The Summer Cloud*. Tokyo: Shunyodo, 1906.
- . *The Twilight*. 2 vols. San Francisco: n. p., 1898.
- . *Yone Noguchi: Collected English Letters*. Ed. Ikuko Atsumi. Tokyo: Yone Noguchi Society, 1975.
- . *The Voice of Valley*. San Francisco: William Doxey, 1897.
- O'Connor, Elizabeth Foley. *Pamela Colman Smith: Artist, Feminist, and Mystic*. Clemson: Clemson University Press, 2021.
- Ransome, Arthur. *The Autobiography of Arthur Ransome*. London: Jonathan Cape, 1977.
- . *Bohemia in London*. New York: Dodd, Mead and Company, 1907.
- Sanders, Julie. *Adaption and Appropriation*. 2nd ed. London: Routledge, 2016.
- Smith, Pamela Colman. *Annancy Stories*. New York: R. H. Russell, 1899. Kindle.
- . *The Green Sheaf*. 13 Vols. London: n. p., 1903-04. Internet Archive. Web. 19 Mar. 2022.
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』東京、彩流社、2005年。
- 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』名古屋、名古屋大学出版会、2012年。
- 星野文子『ヨネ・ノグチ—夢を追いかけた国際詩人』東京、彩流社、2012年。
- 鏡リュウジ『タロットの秘密』東京、講談社、2017年。
- 亀井俊介「野口米次郎のアメリカ詩壇登場」『英語青年』第109巻、第9号、1963年9月、20-21。
- 『ヨネ・ノグチの英文著作』東京、エディション・シナプス、2007年。
- 野口米次郎『英米の十三年』東京、春陽堂、1905年。
- 『藝術の東洋主義』東京、第一書房、1927年。
- 『二重国籍者の詩』東京、玄文社、1921年。
- 角谷由美子「書評 by Elizabeth Foley O'Connor: *Pamela Colman Smith: Artist, Feminist and Mystic*」『女性学評論』第36号 (2022): 129-135。

(原稿受理日 2022年9月19日)